

李光洙の日本語創作と日本文壇

——留学中断後の日本滞在を中心に——

波田野 節子

【要旨】本稿では、李光洙の日本語創作に関するさまざまな疑問を解明する準備として、留学後に彼が日本とどのような関わりを持ったかを整理した。李光洙の四回の日本旅行と一回の長期滞在について、訪問の目的と形態、日本語創作との関わり、日本文壇との接触を考察し、その過程で、李光洙の日本語創作への契機となったと思われる同友会事件にも触れた。

目次

はじめに

1 一九二四年の日本旅行

- (1) 留学の中断
- (2) 旅行の時期と目的

(3) 大正文壇から昭和文壇へ

2 一九三二年の日本旅行

- (1) 山本実彦との出会い
- (2) 日本文人たちとの出会い

- (3) 日本文壇の「文芸復興」
- 3 一九三五―三六年の長期滞在
 - (1) 東京の「家」
 - (2) 「東京見聞記」と「萬爺の死」
 - (3) 同友会事件
 - (4) 馬海松と菊池寛
- 5 一九四三年、最後の訪日
 - (1) 学徒出陣
 - (2) 「日本留學生勸誘団」
 - (3) 日本の出版状況
- 4 一九四二年の第一回大東亞文学者大会
 - (1) 日本文学報国会

おわりに

はじめに

李光洙が一九二五年の「朝鮮文壇」に発表した中学時代の日記には、彼が中学五年生のときに読んだ本のタイトル、洪命憲や崔南善との交友、そして「獄中豪傑」「情育論」や日本語小説「愛か」を書いて投稿したことなどが記されており、彼の初期の創作過程を知るための貴重な資料となっている。⁽¹⁾ その一九二〇年一月十二日(火曜日)に、こんな一節がある。「夜、洪君を訪ねた。電車のなかで僕は、文学者になるうか、なったとしたらどうなるのだろう、朝鮮にはまだ文芸というものが無いから、旗を掲げて日本文壇に打って出るか——こんなことを考えた。⁽²⁾ 中学生の李光洙が書いたものなのか、それとも一九二五年に加筆されたものかはわからない。実際の日記がもともとなつているとはいえ、⁽³⁾ 「朝鮮文壇」に発表するとき李光洙は十五年前に書いた文章にかなりの添削を施したと思われるからだ。⁽⁴⁾ だが、どちらにしろ一九二五年に李光洙が「日本文壇に打って出る」という

文句を原稿用紙に書きつけたことは間違いない。それから十五年後、この言葉は現実のものとなった。一九四〇年の朝鮮芸術賞受賞をきっかけに、李光洙は四冊の単行本を日本で翻訳刊行して「日本文壇に打って出」たのである。⁽⁵⁾

原稿用紙に向かったとき、作家の脳裏には読者がいる。一九一〇年、中学卒業の直前に日本語で短編「愛か」を書いたとき、李光洙が読者として想定したのは山崎俊夫らクラスメートだった。⁽⁶⁾ 一九三一年の「余の作家的態度」で、李光洙は、原稿用紙に向かったときに意識するのは自分の文章を必要とする朝鮮人であり、朝鮮人以外に読まれることは望んでいないと書いた。しかし一九三六年には日本人読者を対象とした日本語小説「萬爺の死」を発表している。⁽⁷⁾ 同友会事件(一九三七年)のあと、彼は病床で「無明」と「사랑(愛)」を朝鮮語で書き、これらが日本語に翻訳されるころに自分でも日本語創作を始めた。李光洙にとって日本語による創作はどのような行爲であったのか。彼の小説は日本文壇ではどう評価されたのか。また彼が日本の雑誌と朝鮮の雑誌に書く場合の想定読者は誰で、内容はどう書き分けられていたのか等々、李光洙の日本語創作に関する疑問は多い。こうした疑問を解明するための基礎的な準備作業として、留学後の李光洙が「内地」日本と直接どのように関わったかを整理する必要がある。李光洙の日本語創作に関しては金允植や李京頃の労作をはじめとして多くの研究があるが、⁽⁸⁾ 作品分析が主で、李光洙の具体的な行動に関する研究はあまりない。⁽⁹⁾ また全集年譜でも李光洙の日本訪問についての記述は不正確である。⁽¹⁰⁾

一九一九年の上海亡命で日本留学を中断した李光洙は、その後いくどか日本の地を踏んだ。一九二四年と一九三二年の旅行。一九三五年から翌年にかけての二回の長期滞在。一九四二年の大東亞文学者大会出席。そして翌年、在日留學生に陸軍特別志願兵を勧誘するため訪日したのが最後の日本滞在となった。本稿では、現在確認されているこの五回(長期滞在は二回をまとめて論ずる)の滞在について、それぞれの目的と形態、日本語創作と

の関わり、そして日本文壇との接触のあり方を見ていくことにする。この過程で、李光洙の日本語創作に関係があるとと思われる同友会事件にも触れる。

1 一九二四年の日本旅行

(1) 留学の中断

早稲田大学在学時に李光洙は『毎日申報』に大量の論説を発表して脚光を浴び、『無情』(一九一七)と『開拓者』(一九一八)によって作家としての名声を得た。この時期の彼は、小説と論説の執筆のほかに、大学の授業、学友会の活動、『學之光』編集などに忙殺されて、日本文壇に目を配る時間的な余裕はなかったと思われる。『毎日申報』に連載した『東京雜信』には新文明を理解する助けとなる「一般人士の必讀書籍數種」が挙げられているが、教科書的な本のリストにすぎず、文学書や作家の名前は入っていない。一九一九年、二・八独立宣言書を起草した李光洙は、宣言書の英訳をもって上海に亡命する。

のちに李光洙が第一回受賞者となる朝鮮芸術賞の創設資金を提供する菊池寛は、このころ「忠直卿行状記」(一九一八)や「恩讐の彼方に」(一九一九)を発表して、作家としての地位を確立しつつあった。菊池は、一九二〇年に連載した新聞小説『真珠夫人』の大ヒットをきっかけに通俗作家の道を歩むことになるが、そのころ上海で『独立新聞』の編集局長をしていた李光洙は日本の新聞に目を通していたから、この小説も読んでいたはずである。一九一九年に山本実彦が創刊した『改造』は、すぐに急成長をはじめた。李光洙は上海から帰国した一九二一年に論説「民族改造論」を執筆し、そのなかで「現在は改造の時代だ! (傍点筆者)」と書いている。このとき彼の脳裏には、雑誌『改造』の躍進ぶりに対する驚異もあったのではないかと思われる。

(2) 旅行の時期と目的

帰国後、『東亜日報』に客員として入社した李光洙は、一九二四年十月から『朝鮮文壇』を主宰した。冒頭にあげた「日記」はその第六号(一九二五年三月発行)に掲載されたものだが、同じ号には、李光洙が亡命のあと初めて日本を訪れて作ったいくつかの詩が「默想録(日本가인김예)」と題して載っている。この日本訪問はいったったのだろう。その前月号の編集後記には、病気のせいで李光洙の作品が少なかったことを詫びる文句がある。李光洙はこのころ脊椎カリエスの手術を受け、東亜日報に連載していた『再生』も中断を余儀なくされていた。⁽¹⁾「默想録」と「日記」は、『朝鮮文壇』の紙面を埋めるために、昔の原稿に手を加えたものだったと推察される。それでは李光洙はいつ東京に行ったのか。⁽²⁾「默想録」の最初の詩「馬関」にある一節「六年ぶりに見る海と山」に拠れば、旧計算法で一九二四年ということになる。一九二四年一月に李光洙は『東亜日報』に発表した「民族的経綸」が物議をかもして一時的に退社している。その年の夏には方仁根から『朝鮮文壇』の話が出て刊行の準備が始まるので、東京に旅行したのはその間ではなかったかと思われる。⁽³⁾一九二二年に修養同盟会を立ち上げた彼は、一九二三年に秘密裏に北京に行つて安昌浩と打ち合わせをしている。⁽⁴⁾このことから見て、一九二四年の旅行の目的は、東京にいる興士団関係者との打ち合わせではなかったかと推測される。

(3) 大正文壇から昭和文壇へ

李光洙が日本を訪れた一九二四(大正十三)年は関東大震災の翌年である。李光洙の詩からは大震災の爪あとの生々しさとともに東京復興の熱気も伝わってくる。このころ日本文壇ではすでに大正から昭和への移行が始まっていた。プロレタリア文学の雑誌『文芸戦線』と新感覚派の雑誌『文芸時代』がこの年に創刊されている。翌年創刊された大衆誌『キング』は、七十四万部を売り上げて国民的な娯楽雑誌へと成長していき、翌一九二六年

には改造社の円本『日本文学全集』の刊行が始まって、日本の出版界は本格的に大衆時代へと突入する。震災の年に菊池寛が趣味的に創刊した『文藝春秋』も飛躍的な成長をとげ、文藝春秋社の社長となった菊池はやがて「文壇の大御所」と呼ばれるようになる。

だが日本から帰ったあとの一九二〇年代後半、李光洙は何度も大病を患いながら『東亜日報』編集局長として社説・記事・コラムを書く多忙な生活を送り、『麻衣太子』『端宗哀史』などの人気小説を連載し、修養同友会(修養同盟会から二六年に改称。二九年には「修養」の文字をとって同友会となる)の活動に専念していた。彼が日本文壇と関わりを持つようになるのは、一九三〇年代に入り、満州事変が起こって日本のジャーナリズムの目が半島と大陸に向けられてからのことである。

2 一九三二年の日本旅行

(1) 山本実彦との出会い

満州国が建国された一九三二年、改造社社長の山本実彦は朝鮮と満州を長期視察し、五月十一日に『東亜日報』の宋鎮禹の招きで、李光洙・尹白南・李象範・朱耀翰・金炳奭・白南雲ら朝鮮文人たちと一夕をともにした。宴席の参加者に対して山本は『改造』誌への執筆を依頼し、李光洙は六月号に朝鮮文学を紹介する文章「朝鮮の文学」、尹白南は十月号に小説「口笛」を発表した。⁽¹⁶⁾『改造』ではこの年の四月に張赫宙の『餓鬼道』が懸賞で入選しており、十月号にも彼の作品「追はれる人々」が掲載されている。この背景には、朝鮮と中国に対する山本の強い関心のほか、プロレタリア文学の弾圧が始まり、また日本が大陸へと「進出」していたこの時期に、『改造』誌が朝鮮の文学をあらたな商品として開発したという見方もある。⁽¹⁷⁾山本は帰国後に出した旅行記『満・鮮』⁽¹⁸⁾のなかで李光洙を紹介し、「朝鮮における文壇的地位は我菊池寛氏の如く」であると書いた。『東亜日報』編集局長で

あると同時に『李舜臣』『奇(土)』等の新聞小説で人気を博していた李光洙は、山本の目に『文藝春秋』の社長でありながら新聞小説で大きな人気を得ている菊池寛と重なったのだろう。

(2) 日本文人たちとの出会い

この年九月に李光洙は日本を訪問した。旅行の目的は会社の用務だが、⁽¹⁹⁾四月に安昌浩が上海で逮捕されているので、この事態を受けて東京にいる興土団関係者と打ち合わせをした可能性もある。このころ朝鮮を訪れていた阿部充家が転倒して体調を崩したので彼を東京まで送り、また友人から託された妹とあわせて一行は三人だった。途中立ち寄った京都では、阿部の友人で古代の日本と朝鮮の交通史に詳しい京都貯蓄銀行の谷村氏を知ったが、この人物はのちに日本語小説「少女の告白」(一九四四)に登場する谷村老人のモデルとなる。一行はこのとき奈良まで足を延ばしたようである。⁽²¹⁾

東京では山本が、李光洙のために、早稲田時代の恩師吉田絃二郎のほか、久米正雄、藤森成吉、佐藤春夫、里見淳ら一流の作家を星岡茶寮に招いて、夕食会を開いてくれた。⁽²²⁾『改造』六月号に朝鮮文学の紹介を書いたばかりの李光洙は、文人たちから多くの質問を受けて、説明におおわらわだつた。その三日後に山本は、晩翠軒で開かれた「定型問題座談会 兼題 万葉の歌と現代の歌」という改造社主催の座談会に李光洙を招いている。土岐善麿、前田夕暮、齋藤茂吉、石原純、北原白秋、折口信夫というそうそうたる日本歌人たちを前に、李光洙は時調と郷歌について説明した。『短歌研究』に掲載された座談会記事のあとがきには、「李光洙氏は現在は朝鮮文字で出版せられている新聞中最も有力なる東亜日報の編集局長である。恰度上京中であられたのを幸ひの機会としてご招待した次第である」とあって、李光洙が作家であることは書かれていない。どうやら山本実彦はこのころ李光洙に、作家としてより朝鮮文学の紹介者としての役割を期待していたようである。

(3) 日本文壇の「文芸復興」

李光洙が日本を訪れた昭和七(一九三二)年は、それまで文壇を制覇していたプロレタリア文学の退潮がはじまり、既成作家の復活と若手芸術派の台頭による「文芸復興」と呼ばれる兆しが見えるころだった。十年後の第一回大東亞文学者大会のとき李光洙を鎌倉の自宅に招待してくれる林房雄はこのころプロレタリア作家で、この年に監獄から出て代表作「青年」を書いている。翌年、小林多喜二が警察に虐殺されて、佐野・鍋山の転向宣言が出るのと転向者が続出し、この年に林房雄、武田麟太郎、小林秀雄、川端康成らが創刊した同人誌「文学界」は、やがて文壇の主流派になっていく。

日本から帰国したあと、李光洙と日本との関係はしばらく途切れる。帰国の翌年に突然「朝鮮日報」に移籍した彼は、翌一九三四年、朝鮮日報社の待遇問題や愛児の急死の衝撃がかさなって新聞社を離れ、放浪の旅に出たあと、紫霞門外の弘智洞に家を建てて閉じこもった⁽²⁵⁾。

3 一九三五—三六年の長期滞在

(1) 東京の「家」

一九三五年、李光洙が弘智洞の家で精神的な落ち着きを取りもどし、また安昌浩が仮出所して平壤郊外に居を定めたころ、妻の許英肅が医師研修のために三人の子供を連れて日本で暮らしはじめた。のちに弘智洞の家を売るときに書いた短編「鬻庄記」のなかで、李光洙はこれまで幾度も引越したことを回想し、病気のため、子供の教育のため、その子が死んだため、そしてまた妻の「医学の勉強」のために引越したと書いている⁽²⁶⁾。妻と子供たちが住む東京の家が自分の「家」であると認識していたことがうかがわれる。日本に根拠地ができたことで、李光洙と日本との関係も復活することになった。李光洙はこの年の末に家族に会いに行つて一月まで滞在し、そ

の間に阿部充家の葬儀に参列した⁽²⁷⁾。彼が朝鮮に帰つた翌月に二・二六事件が起きている。

(2) 「東京見聞記」と「萬爺の死」

李光洙は、一九三六年五月に再び東京に行つて六月まで滞在し、帰国後、「朝光」に「東京求景記(見聞記)」を隔月連載した。

- ① 「東京子習記」「朝光」一九三六年九月号(渡航証明書 南国初夏 玄海灘 車中)⁽²⁸⁾
- ② 「東京子習記」「朝光」一九三六年十一月号(国技館列言 銀座)⁽²⁹⁾
- ③ 「東京求景記」「朝光」一九三七年新年号(農士学校外高麗神社 歌舞伎劇)⁽³⁰⁾
- ④ 「東京文人會見記—東京求景記の継続」「朝光」一九三七年三月号(星丘茶寮の一夜 吉田氏外藤森氏の訪問)⁽³¹⁾

このなかで特に注目されるのは、安岡正篤^(まきひら)(一八九八—一九八三)が創立した農士学校への訪問である(③参照)。陽明学の思想家である安岡は、日本主義的な精神教化をめざす金鶏学院と農本主義的な教育を行なう農士学校を創立し、官僚や軍人にも影響を与えて二・二六事件とも関係が取りざたされた人物である。農士学校を訪問するに先立ち、李光洙は安岡に直接会つて学校の「主義精神」のあらましを聞いている。李光洙がどういふ経緯で安岡を訪ねたかは不明である。李光洙にはもともと農本主義的な傾向があったし、また理想村の建設という安昌浩の構想の参考にするつもりでこの学校を訪問したという見方もある⁽³²⁾。しかしながら「東京求景記」に見られる、「農士学校の精神は、利己主義・個人主義を捨てて団体主義・奉仕主義で生きることにある」⁽³³⁾や、「人々が欧米の個人主義に染まってこの精神を失ってしまったとき、農村は疲弊し個人生活は寂莫たるものになる」⁽³⁴⁾という言葉、そして沐浴齋戒や神前礼拝など神道風の訓練と労働を主とする質実剛健な教育に対する賛嘆は、英米の

利己主義を攻撃する文章や「志願兵訓練所の一日」(一九四〇)など訓練所の生活を賛美する文章を書いた対日協力期の李光洙の姿を連想させる。対日協力を始める以前と以後の李光洙の思想の連続性は今後の研究課題の一つである。⁽³⁶⁾

【改造】の山本実彦は今回も李光洙を歓迎し、恩師の吉田絃二郎、藤森成吉、女性作家の林芙美子とともに国技館の相撲見物に招待してくれた(②参照)。数日後、李光洙は藤森と吉田の家を訪問している(④参照)。

七月に朝鮮にもどった李光洙は、【改造】八月号に短編「萬爺の死」を発表した。「愛か」以来、じつに二十七年ぶりの日本語小説である。時間的に見て、日本で書いたか、あるいは帰国してすぐの執筆と推定される。執筆の直接の契機は山本からの依頼であろうが、李光洙自身も東京に長期滞在しているうちに「日本文壇に打って出る」という昔の夢を思い出し、日本語創作への意欲を抱いたのではないだろうか。【改造】の懸賞に当選した張赫宙が、着々と日本文壇での地歩を固めていることにも刺激されたのかもしれない。⁽³⁷⁾「萬爺の死」は李光洙が対日協力と関わりなく日本語で書いた作品という点で注目される。しかし、こんな形で日本語創作はこの一編で終わった。三年後に李光洙は、まったく違った状況のなかで日本語創作を始めることになる。

(3) 同友会事件

李光洙が帰国した年の夏に赴任してきた南次郎総督は、まもなく皇民化政策の一環として日本語の使用を奨励しはじめた。⁽³⁸⁾これによって、日本語創作には、日本文壇への進出という個人的な野心を越え、総督府の政策への協力という意味が付与されることになったのである。翌一九三七年六月、日中戦争勃発の前月に同友会事件が起きる。百八十一名が検挙され、⁽³⁹⁾自白の強要と拷問により会員二名が死亡、一名が廃人になり、翌年、病気で保釈されていた安昌浩も死亡して、会員たちの運命は李光洙の決断にかかることになった。李光洙は病床で諦念に満

ちた中編「無明」を執筆し、⁽⁴⁰⁾八月の裁判開始をはさんで十一月には仲間とともに思想転向申述書を裁判所に提出する。⁽⁴¹⁾翌一九三九年に書いた「麗庄記」のなかで李光洙は、これまで自分がやってきた民族運動や人格改造運動は「皮相」で「無力」なものだったと述懐した。彼の心のなかで大きな変化が起きたことがうかがわれる。このころから彼の日本語創作が始まり、しだいに本格化していく。⁽⁴²⁾

(4) 馬海松と菊池寛

【無明】は一九三九年の【文章】一月号に発表されたあと、金史良によって翻訳され、十一月に日本の大衆娯楽誌「モダン日本」の臨時増刊号「モダン日本朝鮮版」に掲載された。モダン日本社の社長馬海松⁽⁴³⁾は開城出身で、留学中に菊池寛の門下生となり、⁽⁴⁴⁾文藝春秋社の社員をへて子会社であるモダン日本社の社長になった。故郷の文化を紹介することに使命感をもっていた彼は、自分の雑誌で一九三九年と翌年の二回にわたり朝鮮特集号を出したほか、菊池寛に出資させて「朝鮮芸術賞」を創設した。⁽⁴⁵⁾一九三九年の特集号には賞創設の案内とともに李光洙の「無明」、李孝石の「蕎麦の花の頃」、李泰俊の「鴉」、そして金素月や白石らの詩が翻訳掲載されている。詩と小説の掲載場所は別々だが、目次を見ると「朝鮮芸術賞設定」という見出しのあとに全作品のタイトルがまとめて並べられており、掲載された作品はそのまま「朝鮮芸術賞」の候補作のように見える。実際、受賞決定発表の審査評を読めば明らかのように、日本側審査員たちが読んだ李光洙の作品は「無明」だけであり、朝鮮側推薦者の推薦根拠は李光洙のこれまでの業績であった。⁽⁴⁷⁾したがって、翌年二月十一日に発表された李光洙の第一回朝鮮芸術賞受賞は、馬海松の既定路線と見るべきであろう。受賞発表後、モダン日本社はただちに李光洙の短編集【嘉実】を刊行し、「有情」、「愛」前・後編と合わせて四冊の翻訳本をつぎつぎに刊行した。⁽⁴⁸⁾要するに李光洙はモダン日本社が企画した販売戦略に乗っていたのである。モダン日本社の背後には親会社である文藝春秋社があっ

た。これまで山本実彦の改造社しか日本文壇へのつながりを持たなかった李光洙は、馬海松を通じて菊池寛の文藝春秋社という後ろ盾を持つことになったのである。

受賞のあと菊池寛は『文藝春秋』のコラム「話の屑籠」で、「李光洙に―筆者註）三月中に東京に来て貰って、日本の文壇へも紹介したいと思ってる」と書き、新聞も三月中に賞の授与式が行われると報じたが、裁判中の身である李光洙はこのとき日本に来ることはできなかった。前年の一番では会員全員が無罪判決を受けたが、検察側が即日控訴していたのである。注目されるのは、受賞に関する菊池のコラムでも新聞記事でも、創氏改名に言及していることである。東京朝日新聞は「氏」に沸く朝鮮―今日から受付開始」という大見出しをつけて、二月十一日の紀元節を期して朝鮮で創氏改名の受付が始まり、李光洙が香山光郎と改名したことを伝え、そのあと小見出しで彼の朝鮮芸術賞受賞を伝えている。また菊池寛も「この人は、朝鮮人が日本姓を名乗れることになったとき、直ちに香山光郎と改姓したとのことである」とわざわざ書いている。第一回朝鮮芸術賞の受賞者発表の時期が創氏改名の受付にあわせて戦略的に選ばれたこと、そして李光洙の積極的な対日協力が受賞に影響していたことがうかがわれる。

この一九四〇年八月、菊池寛が京城を訪れて李光洙と初めて顔を合わせた。文芸家協会の会長である菊池は、文学者たちが班を作って各地で国民精神高揚のための講演を行なう「文芸銃後運動」を提唱し、その朝鮮・満州班の一員として、小林秀雄・久米正雄・大仏次郎・中野実を率いてきたのである。彼らは京城で講演会をひらき、『京城日報』主催の座談会に出席した。このとき執筆依頼を受けたのだろう。李光洙はこのあと『文藝春秋』と『文学界』にそれぞれエッセーを書いている。このころの『文学界』は文藝春秋社から発行されて経営も安定し、多くの同人を擁して『文壇強者連盟』と言われるまでになっていた。こうして李光洙は日本文壇の有力者たちとつながりを持つことになったのである。

翌一九四一年十一月、同友会事件が結審して会員全員が無罪宣告を受けた。「大東亞」戦争勃発の前月だった。

4 一九四二年の第一回大東亞文学者大会

(1) 日本文学報国会

一九四二年五月、国策への協力を目的とする文学者団体、日本文学報国会が設立された。⁽⁵⁴⁾大東亞文学者大会はこの団体が行った主要な事業の一つで、「共栄圏文化の交流を図って新しき東洋文化の建設に資」することを目的に一九四二年と四三年に東京、四四年に南京で開催された。李光洙は第一回と第三回大会に出席している。

(2) プロモーション活動

李光洙は第一回大東亞文学者大会に参加するため、一九四二年十一月に訪日した。翌年一月の『文学界』に発表した紀行文「三京印象記」のなかで、彼は日本での行動と印象をくわしく記している。十一月一日に東京駅に到着した李光洙は、神社参拝、歓迎宴、軍隊見学などたくさん行事をこなしながら会議に出席し、文学者たちと交流した。それは「共栄圏文化の交流」であると同時に、彼のプロモーション活動でもあったといえる。このとき中国代表の一人だった張我軍の大会参加の目的は、日本語教育のために日本を見聞すること、そして武者小路実篤や島崎藤村らとじかに会って翻訳について話すことだったという。⁽⁵⁵⁾また生活が不如意であったバイコフは、自筆のスケッチ画を四―五十点持参して自分の愛読者に販売しようとした。菊池は『文藝春秋』のコラム「話の屑籠」で宣伝をしてやり、購入者には自分の色紙を進呈すると書いている。⁽⁵⁶⁾こうした例が示すように、このとき東京に集まった作家たちには、それぞれの事情と思惑があったのである。

李光洙は、モダン日本社から前年刊行した『愛』後編につづく五冊目として、連載を終えたばかりの『元暁大

師」を出したいと考えていたのではないかと思われる。⁽⁵⁷⁾ 菊池寛もこの事情を知っていたのだろう。三日の開会式の夜、李光洙を築地の料亭に案内しながら、「君も東京で小説を売らなう。それなら東京の文人達に逢って置いた方がいい。顔を知らぬと中々批評も書いて呉れぬのでね」と言い、李光洙はこれを「私を東京の文人方に引き合わせようという老婆心」だと受け取っている。菊池はこうした細かな気配りをする人物だったようである。李光洙はこの夜、片岡鉄平、河上徹太郎、横光利一、吉川英治、舟橋聖一、林房雄を紹介され、三日後には林房雄の誘いで小林秀雄や青山二郎らと痛飲して、翌日、林の鎌倉の自宅で遊んだ。鎌倉には林や小林、川端康成など多くの作家が住んでおり、当時の文壇では「鎌倉文士」という言葉が通用していた。⁽⁵⁸⁾

東京での日程を終えた李光洙は、他の大会参加者たちといっしょに京都と奈良の寺社をまわり、十一月十三日に日本を離れた。⁽⁵⁹⁾ 東京では中学時代の友人山崎俊夫と三十二年ぶりに再会して旧交を温めたが、これについて李光洙は「三京印象記」でいっさい触れていない。⁽⁶⁰⁾ また山本実彦についても同様である。改造社は、会議初日の夜に海外参加者と報国会の役員のために宴席を設けており、そこで李光洙は山本と顔を合わせているはずだが、そのことも書かれていない。「三京印象記」は、これが掲載される「文学界」の同人である河上徹太郎や小林秀雄たち、そして自分の作品に書評を書いてくれそうな作家を念頭において書かれたものだったからであろう。⁽⁶¹⁾

(3) 日本の状況

日本は開戦当初のめざましい勝利のあと、一九四二年六月に早くもミッドウエー沖海戦で大敗を喫し、大東亞文学者大会開催のころはガダルカナルで苦戦中だった。こうした情報は伝えられていなかったため、このころまだ人々は意気盛んであったが、「三京印象記」を読むと、菊池寛が夕食に飲む酒を持ってきて、半分を残して築地の料亭に持っていくとか、奈良ホテルに久米正雄がウイスキーを持参するなど、物資の不足はおおいがたい。

出版界では紙が不足してすでに二年前から国家統制がはじまっており、この翌年には出版事業令が公布されて出版社の統合整理が始まる。戦況は急激に悪化していき、東京では「小説を売る」どころか、雑誌や本を出すこと自体が難しくなっていく。そして、李光洙の五冊目の単行本が出ることはついになかった。

5 一九四三年、最後の訪日

(1) 学徒出陣

翌一九四三年八月に第二回大東亞文学者決戦大会が東京で開かれた。戦況の厳しさを反映して大会には「決戦」という文字が付け加えられている。李光洙は、四月に発足した朝鮮文人報国会の理事に就任して多忙だったせい、この大会には参加していない。⁽⁶²⁾ だが、それから三ヵ月、李光洙は突然日本を訪れることになった。留学中の朝鮮人学生たちに兵志願を呼びかけるためである。

この年十月、戦争の泥沼化による兵力の不足をおぎなうために、日本政府は法文系大学と専門学校に在籍する二十一歳以上の学生たちの徴兵猶予を勅令で停止した。いわゆる学徒出陣である。ところが、まだ徴兵が施行されていない朝鮮と台湾の学生は徴兵猶予停止の対象にならなかったため、省令「陸軍特別志願兵臨時採用規則」により、徴兵でなく志願という形で徴集することにした。

このとき朝鮮半島にいる適格者は約千名だったが、内地日本には三倍近くの二千七百名もいた。朝鮮人の高等教育に冷淡な朝鮮総督府の方針のために、勉学をのぞむ多くの若者は日本に留学せざるを得なかったからである。受付期間の十月二十五日から十一月二十日まで、総督府はあらゆる手段をもちいて志願を強制し、その結果、朝鮮在住の適格者、および家族と相談するために日本から戻ってきた学生のほとんどが志願を余儀なくされた。受付が締め切られた二日後の朝日新聞の記事は、朝鮮在住者の九割以上、日本から朝鮮に帰省してきた千三百名

のほとんど全員が志願したと報じている。ところが、この記事は日本に残った学生のことには触れていない。朝鮮総督府の強権がおよばない日本においては志願が低迷し、最終的な志願者数は五百五名、わずか三十六パーセントだった。このように低い数字を紙面に載せるわけにいかなかったのである。⁽⁶⁵⁾

(2) 「日本留学生勧誘団」

日本での志願窓口となっていた朝鮮奨学会は、受付が始まるとすぐに志願の少なさを予測し、李光洙と崔南善をはじめ朝鮮の名士たちに、日本に来て学生たちを説得するよう要請した。十一月七日、京城で急遽、名士十二名による「日本留学生勧誘団」が組織され、李光洙は崔南善とともに先発隊として翌日京城を発った。関西の学生を勧誘してから十二日に東京入りした彼らは、十四日と十九日に明治大学講堂で講演会を開いたほか、宿所の神田錦町の昌平館で、日夜訪ねてくる学生たちと膝を突き合わせて志願を勧めた。⁽⁶⁷⁾「日本留学生勧誘団」のほかにも、出身学校別の代表団である「母校訪問説得団」、「慶北代表団」や「平南代表団」など、郷里の代表団、道・郡・邑面単位の行政縦割り代表団、宗門会、同窓会、村の個人有志団、「地縁、血縁、学縁のありとあらゆる人間関係を負った〈使節〉が陸統と海を渡⁽⁶⁸⁾り、留学生たちを志願させるための説得をおこなった。こうして十一月十日に「二百名程度」だった志願者数は、締切の二十日を迎えて五百名を越えたのである。

それから五年後、李光洙は「わが告白」(一九四八)にこう書いている。

「徴用や徴兵に行く当事者も無理やり引っぱられていけば待遇が悪いために苦痛が増すであろうし、家族もそうでであろう。だが自発的な態度で行けば待遇も良くなるし、将来受ける代償も大きくなるはずだ⁽⁷⁰⁾」

「(日本は―筆者註) 大学と専門学校に朝鮮人学生の入学を従来もさまざまな手段で制限してきたが、(協力しなければ―同上) それがますます深刻になるだろう。(中略) 我々の子供たちが大学・専門学校から排斥された

らたいへんなことになる」⁽⁷¹⁾

このときの李光洙の憂慮は、志願が低迷するなかで発表された小磯國昭総督の談話と、最後まで志願に応じなかった学生たちのその後の処遇を考えあわせることで理解される。

内地で志願者が二百名程度に留まっていた十一月十日の記者会見で、小磯は「内地在學生」たちに次のように呼びかけた。自分は、強要されて志願するような人間は欲しくない。だが全員が自主的に志願するであろうことを信じている。万が一志願しない者があつたりすれば、最近ようやく実を結びはじめた朝鮮人の真価を一般に認識させるための努力と実践(前年発表された徴兵制実施決定のことか―筆者註)は水泡に帰すことになる。「内地在學生」は事の重大性をよくわかっていないようだが、「自分としては今回の志願の結果によっては、半島統治の根本方針について再検討を加えねばならぬとまでも考えている」⁽⁷²⁾。

要するに、学生を皇民化させないような学校も、皇民化しない学生も不要であるという意味を言外に含ませた、これはまさに恫喝である。最後まで志願しなかった留学生たちは、締め切りのあと「非国民」の烙印を押されて大学から休退学命令や除籍処分を受け、逮捕検束されて、あるものは遅まきながら志願に応じて軍隊で悲惨な待遇を受け、あるものは朝鮮に送還されて総督府に送られ、あるものは日本で労働に従事して監視処分をうけた。⁽⁷³⁾

(3) 日本の出版状況

このように深刻な目的の訪日であるから、李光洙には前年交流した作家たちと会うような時間的、精神的な余裕はなかったことだろう。どちらにしろ、このころ日本の出版業界は整理統合が進行しており、混乱状態にあった。翌年一月に行なわれた統合の結果、「文藝春秋」は総合雑誌部門に残ることができずに文芸誌として残り、そのおおりで「文学界」が四月で廃刊となった。⁽⁷⁴⁾「改造」もやはり総合雑誌としては残れず、時局雑誌として残

ったものの、七月には当局から「自発的廃業解散」を要求されて廃刊した。一九四三年初めに「新太陽」と改称していた娯楽雑誌「モダン日本」は、馬海松が社長のまま刊行をつづけることができた。⁽⁷⁵⁾ 李光洙が勧誘のために日本を訪れた月には、この「新太陽」に李光洙の「兵になれる」⁽⁷⁶⁾が掲載されている。翌年の「新太陽」十月号にも李光洙は「少女の告白」を発表しており、彼が馬海松を通じて最後まで日本文壇とつながっていたことをうかがわせる。度重なる空襲で仕事に見切りをつけた馬海松が日本を離れたのは、一九四五年一月三十日のことであつた。⁽⁷⁷⁾

おわりに

李光洙は大量の日本文語を残したが、その多くは時局的な文章で小説はさほど多くない。朝鮮で発表した日本語小説のうち、長編「心相触れてこそ」と「四十年」は未完であり、完結しているのは短編の「蠅」「加川校長」「大東亞」「元述の出征」くらいである。日本で発表したのは「愛か」「萬爺の死」「兵になれる」「少女の告白」だが、最初の二つは対日協力とは関わりがない。また日本語で書かれた随筆も時局と関わり合いが多い。

李光洙にとって日本語で書くとはどういう行為であつたのか。日本の雑誌と朝鮮の雑誌に書く場合に、はたして内容は書き分けられていたのか、また彼の小説は日本文壇ではどのような位置にあつたのかなど、李光洙の日本文語創作に関する疑問は多い。ジャンルや内容、発表の場所、書いた状況などを視野に入れたきめ細かな研究が必要であるが、そのための整理はいまだ充分ではない状態である。

本稿はそうした基本的な整理作業の一つとして、李光洙が「内地」日本と直接どのように関わつたかを考察した。具体的には、留学中断後の李光洙が、いつどのような形で日本を訪れ、そのとき日本の文学界はどのような状況にあつたかを考察した。

一九二一年に朝鮮に帰国した李光洙は、その三年後に旅行者として日本を訪れて震災後の日本を見た。満州事変が起こり、日本の言論界の視線が朝鮮・満州へと向かつたころ、彼は東亜日報編集局長の立場で改造社の社長山本実彦を知り、社用で日本を訪れて日本文人たちとも交流した。一九三〇年代なかば、妻の許英肅の医学研修のため東京に「家」ができたことを契機に、彼は東京に長期滞在して二十七年ぶりの日本語小説「萬爺の死」を書く。しかし、このあと南総督が打ち出した日本語奨励の方針は、日本語創作という行為に対日協力の意味を付与することになった。

同友会事件がおき、安昌浩の死によつて会の責任者となつた李光洙は、病床で諦念にあふれた「無明」を執筆し、翌年には「甕庄記」を書いて、これまで自分がやってきた民族運動や人格改造運動は皮相で無力なものだったと述懐した。「無明」は金史良によつて翻訳されて朝鮮芸術賞を受賞したが、そこにはモダン日本社社長馬海松の朝鮮文化紹介への熱意と、それに同居する販売戦略があつた。受賞の直後、「嘉実」「有情」「愛」前・後編と、李光洙作品の翻訳がつぎつぎと刊行された。

一九四二年の大東亞文学者大会に参加したときの李光洙は、最近作「元暁大師」を五冊目として日本に紹介したいと考えていたようだが、戦況の悪化はついにそれを許さなかつた。翌年、学徒出陣に朝鮮人学生を志願させる勧誘をするため日本に来たのが、李光洙の最後の訪日になった。

付記

本稿は、二〇一一年十一月四日に、延世大学原州キャンパスで開催された、延世大学近代韓国学研究所主催の国際シンポジウム「韓日近代語文学研究の争点(4)」において韓国語で発表した原稿をもとに、内容を大幅に修正したものである。筆者を招聘して下さった近代韓国学研究所長 金榮敏延世大学韓国語国文学科教授に、この場を借りて感謝の意を申し上げる。

註

- (1) 一九〇九年十一月七日から翌年一月十五日まで約一ヶ月間の日記が二回に分けて掲載され、『朝鮮文壇』第六号(一九二五、三)には(十六年前に東京の某中学に留学하던十八歲少年의告白)、第七号(一九二五、四)には(十八歲少年이東京에서한日記)という副題が付けられている。
- (2) 拙訳。以下、本稿の日本語訳は特に断りがない限り筆者訳による。原文は「日本文壇에 기록을 들이고 나설까」、『朝鮮文壇』第七号、六頁。
- (3) 以下のような点から見て、実際の日記がもとなっていないと推測される。(一)日付につけられた曜日がそれぞれ正確であること。(二)十一月二十一日(日曜)にこの日起きた二本榎町の殺人事件のことが載っていること。(三)十二月十四日(火曜)に前夜起きた白金の火災のことが載っていること。(四)十二月二十二日(水曜)に「李完用が死んだ」とあるが、この日、日本に来ていた李完用が李在明に刺されて重傷を負うという事件が起き、一時、新聞は「刺殺」という言葉を使ったこと。
- (4) じっさい「日記」には付け加えたと思われる部分も目につく。たとえば十二月六日の山崎俊夫への言及は加筆と推測される。
- (5) 日韓併合がせまっていたこの時期、「愛か」の内容は『大韓興学报』の論調とはまったく合っていない。李光洙は朝鮮語で書いた詩「獄中豪傑」や論説「情育論」と日本語で書いた小説「愛か」を読者に応じて書きわけていたように見える。
- (6) 『改造』一九三六年八月号
- (7) 金允植「이광수의 일어 창작 및 사문선」、도서출판역락、二〇〇七／李京垣「이광수의 친일문학연구」、태학사、一九九八／白川春子「李光洙の日本語小説について」『年報朝鮮学』第五号、一九九五など。
- (8) 金允植の評伝「李光洙와 그의 시대」(舎一九九九)では少し触れられているが、外部資料との突き合せはされていない。
- (9) 一九六二年から六三年にかけて三中堂から刊行された『李光洙全集』(以下「全集」と略記する)第二十巻の年譜には一九二四年と三二年の日本旅行の記述がない。一九三五年と翌年の長期滞在についての記述は正確だが一九四二年の大東亞文学者大会出席の記述がない。また一九四二年十二月の項にある「学兵勸誘滞日」は一九四三年十一月の間違いである。

- (10) 『真珠夫人』は一九二〇年六月から十二月まで『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』に連載された。
- (11) 『朝鮮文壇』第十号(一九二五年七月発行)掲載の「病床에서」と題する文章で、李光洙は雑誌の主宰をやめることを告げ、三月十二日に入院したと書いている。
- (12) 金允植は、春園の妻がそのころ留学中だったとしているが、全集年譜によれば許英肅の留学はその前年の一九二二年三月から六月のことである。金允植「李光洙와 그의 시대2」、舎、一九九九、二五四頁
- (13) 「나의告白」によれば、一月に『東亜日報』を退いた李光洙は三月に急病を發し、その後三年間ずっと体調が悪かったという。『全集』13、二五三頁
- (14) 全集年譜では、一九二四年四月に安昌浩と北京で会ったことになっているが、これは前年の間違いではないかと思われる。一九二三年から二四年にかけての北京行きと日本行きについては不明なことが多い。一九三一年四月月号「千里」の特集「最近十年間筆禍、舌禍史」(『全集』未収)で李光洙は、「民族改造論」と「經綸」と題して、「民族的経綸」の筆禍を回想している。それによると一九二四年正月の社説として「民族的経綸」を書いたあと中国旅行に発ったが、四月に帰ってみるとこの記事がもとで大騒ぎになつており、結局、新聞社から身を引いたという。だが正
- 月に掲載された論説のために四月に退社するというのは時間的に見て不自然だし、中国旅行の期間も長すぎる。また註(13)に記したように、解放後の「我が告白」では、東亜日報を退いたのは一月だと書いている。「千里」で、旅行の途中で北京にいる安昌浩に「会わないわけにもいかないのでちょっと会ったと書いてるのは、彼が亡命中の人物であることを考慮してのことだと思われるが、これと同様に、一九二四年の日本行きを前年の北京行きと重ねることで、李光洙は事実の曖昧化を図ったのかもしれない。なお、一九二三年の訪中の時期も資料によって違っている。『思想叢報』(朝鮮総督府高等法院検事局思想部二十四、一九四〇、九、一九三頁)では一九二三年二月、朝鮮総督府警務局の「最近における朝鮮統治状況(昭和十三年)」(巖南堂書店、一九七八、三六六頁)では一九二三年三月、「仁村金性洙傳」(一九七六、二六三頁)では一九二三年十月である。
- (15) 高栄蘭はこの宴会が「広告主への接待の意味あいもあった」としている。(『出版帝国の「戦争」——一九三〇年前後の改造社と山本実彦』満・鮮から『文学』三・四月号、二〇一〇、二六頁)
- (16) 朱耀翰は、自分も山本から「詩歌」について書くよう頼まれたが断つたという話を「千里」の座談会でしてい

る。「文学問題評論会」、「三千里」一九三四年六月号、二〇六頁。ただし宴会当日の五月十一日に依頼した原稿が六月号に載ることには無理がある。山本が李光洙に原稿を依頼したのはこの日より前だと思われる。

- (17) 金允植『李光洙とユの時代』、奎、一九九九、二六〇—二六二頁／白川豊『張赫宙研究』、『植民地期朝鮮の作家と日本』、大学教育出版、一九九五、一七九頁／『解説—追われる人々—をめぐって』、『張赫宙日本語作品選』、勉誠出版、二〇〇三、三三二頁／高栄蘭『交错する文化と欲望される「朝鮮」』、『語文』一三六、二〇一〇、三

- (18) 山本実彦『満・鮮』、改造社、一九三三、二五頁

(19) 一九三九年三月十七日『京城日報』、『無佛翁の憶出(6)』で、李光洙は阿部を東京まで送ったことを回想し、それは「私が新聞社の用務で私の社の幹部と東京會館で、在京の名士方を招請して一夕の宴を張った時」であり、「その後、私は新聞から身を引いた」と書いている。本文にもあるように李光洙は一九三四年に新聞社を離れているので、これが一九三二年の訪日のことだとわかる。高栄蘭によれば、一九三〇年前後は朝鮮の新聞の広告収入の多くが内地からのものだったため、新聞社が日本支局を設置して広告の誘致を行なったという(前掲註「出版帝国の「戦争」」二二六頁)。あるいはこうした用向きだったのかも

れない。

- (20) 「少女の告白」、『新太陽』、一九四四年十月号／『近代朝鮮文学日本語作品集一九三九—一九四五 創作篇2』、四七一頁。谷村の名前は「三京印象記」にも出てくる。『文学界』一九四三年一月号、八二頁

- (21) 「春日神社に—筆者—十年前に一度お参りしたことがある」、『三京印象記』、八一頁

- (22) 「星丘茶寮の文人雅会」、『新東亞』一九三三年一月号／『全集』16、四〇—四〇四頁

- (23) 『短歌研究』十一月号、改造社、一九三二—同上、五七頁

- (25) 「春園出家放浪記」、『三千里』、一九三四、六

- (26) 「그리고는 아내가 의학공부를 더 한다고 하여서 동경으로 옮겼으니」、『全集』16、四九六頁／「それからまた一度は、妻が医学の勉強をもう少しするのだと云って居を東京に移したのですが」、『櫻庄記』、『嘉実』、一四二頁

- (27) 「無佛翁の憶出(5)」、『京城日報』一九三九年三月十六日

- (28) 『全集』18 二八三—二八八頁

- (29) 『全集』18 二八九—二九四頁

- (30) 『全集』18 二九四—三〇一頁

- (31) 『全集』16 四一六—四二三頁

- (32) 「理想村計画」『島山安昌浩』、『全集』13、一五三—一六一頁。河かおるは、この見学は理想村計画と関連があると推察している。「植民地期朝鮮における同友会—地下ナシヨナリズムについての—考察」、『朝鮮史研究会論文集No.36』、一九九八、一五四頁

- (33) 『全集』18 二九五頁
- (34) 『全集』18 二九五—二九六頁
- (35) 「国民総力」一九四〇年十一月号／『同胞に寄す』、博文書館、一九四一 所収

- (36) 波田野節子「大東亞文学者大会での李光洙発言に見る『連統性』」第7回植民主義と文学 5집・植民地近代斗東 아시안文学國際學術大会発表論文集『大東亞文学者大会報告문집』二〇一一、所収

- (37) 張赫宙は一九三四年に短編集「權といふ男」を改造社から、一九三五年に「仁王洞時代」を河出書房から刊行している。なお李光洙は一九三六年一月の「新人文文学」座談会記事で、朝鮮語の素晴らしさを賞賛し、朝鮮人の事大主義を批判しながら張赫宙を引き合いに出して「張赫宙氏などは日本語で小説を書いています、東京で発表さえされりやたいしたもんだと思っっていますからね」と述べ、春城(盧子泳)はそれを受けて、「カルボウ」は朝鮮語に翻訳すれば三文の価値もないと発言している。『全集』20、二五

李光洙の日本語創作と日本文壇(波田野節子)

三頁

- (38) 南次郎は李光洙が帰国して二か月後の一九三六年八月に赴任した。その後の日本語使用奨励は以下のとおり。一九三七年二月十六日、内務局長から道府県会での国語使用奨励の通牒。三月十七日、総督府、日本語使用の徹底の通知を各道に発す。五月二十日、朝鮮人学校で授業以外の日本語使用、父兄のための講習奨励の通達。

- (39) 高等法院検事局思想部「思想彙報」第24号、昭和十五年九月、一八七頁。このうち四十一名が起訴された。なお、当時の同友会員の数は百三十名程度だったという。河かおる「植民地期朝鮮における同友会」、一五九頁

- (40) 全集年譜による。

- (41) 「李光洙以下二十八名は去る十一月三日明治節の佳節を下し、裁判所の許可を得て京城に会合し、思想転向会議を開催し、皇居遥拝国歌奏案皇軍戦没将兵および戦傷白衣勇士の慰霊ならびに平癒祈願後、打ち揃って朝鮮神宮に参拝し終えて、思想転向申合書を作成の上、裁判長宛提出すると共に同友会の入会金三百円および当日出席者の酬出せる二、八八八円を国防献金することに決し(後略)「朝鮮総督府警務局編『最近に於ける朝鮮治安状況(昭和十三年)』、巖南堂出版、一九七八、七三—七四頁／一九三八年十一月四日『毎日新報』に「李光洙氏等33人臣民の赤誠披

瀧神宮参拜、賽銭奉納」の記事がある。

- (42) 「親日反民族行為真相糾明報告書」によれば、この時期で最初の日本語作品は一九三九年『東洋之光』二月号に発表した「折にふれて歌へる」である。この年、李光洙は三月に『京城日報』に「無佛翁の憶出」を連載したほか『東洋之光』八月号に「山家日記」(ただし末尾に編集部訳とある)を発表している。翌年は三月から七月まで『緑旗』に本格的な日本語小説「心相触れてこそ」(未完)を連載し、五月の『京城日報』に「山寺の人々」、九月の『総動員』に「内鮮青年に寄す」、十月の『京城日報』に「同胞に寄す」などを、また日本では四月の『東京朝日新聞』に「京城の春」、八月の『モダン日本朝鮮版』に「我が交友録」、「文藝春秋」十一月号に「顔が変わる」を発表した。

- (43) 馬海松は、十六歳の時から日本大学で菊池の講義を聴き、十九歳のときに門下生になったと回想している。「朝鮮に叫ぶ人々」、「文藝春秋」一九五三年三月号、一〇八頁／菊池は「彼は十七の年から、自分の手許に来た」と書いている。「臺灣と朝鮮」、「其心記」、建設社、一九四六、一〇六頁

(44) 馬海松は最初の臨時増刊号について、「売れ行きがよくてもそれ一冊で大儲けするわけでないが、売れなければ会社経営を続けるのがむずかしくなるほど力を入れ」たこ

と、発行直前に父親の訃報が届いたが最初は故郷に帰ろうとしなかったことを、一九五六年から六〇年にかけて『思想界』に連載した自伝で回想している。馬海松「아름다운 새벽」、文學斗知性社、二〇〇〇、一三六頁

- (45) 「朝鮮芸術賞」の創設は一九三九年十一月発行の特集号「モダン日本朝鮮版」で発表された。菊池寛は「文藝春秋」一九四〇年三月号の「話の肩籠」に「モダン日本」の馬海松君から頼まれて朝鮮芸術賞の資金を出すことにした(後略)と書いている。『菊池寛全集』第24巻、文藝春秋社、一九九五、四二四頁

- (46) 朱耀翰・金起林・毛允淑・金素月・白石・鄭芝溶の詩が金素雲と金鍾漢の訳で載っている。小説は、李孝石の「蕎麦の花の頃」が自訳で李泰俊の「鴉」が朴元俊訳。

- (47) 「モダン日本」一九四〇年四月号、一四〇―一四三頁

- (48) 「嘉実」は一九四〇年四月、「有情」が六月、「愛」前編が十月、後編が一九四一年三月に刊行された。

- (49) 「文藝春秋」一九四〇年四月号／『菊池寛全集』第24巻四二四頁

- (50) 『東京朝日新聞』一九四〇年二月十一日

- (51) 文芸協会は、菊池寛が作家の権利擁護と相互扶助を目的に一九二一年に設立した小説家協会と、一九二〇年に設立された劇作家協会とが一九二六年に合併してできた団体

である。一九四二年に日本文学報国会に吸収されたが、戦後一九四五年に日本文芸家協会として再建され、ふたたび菊池が会長に就任した。

- (52) 京城では講演会の聴衆があまりに多かつたため、翌日、臨時に二回目の講演会を行なった。『文藝春秋』「話の肩籠」昭和十五年九月号、八月号(『菊池寛全集』第24巻、四三九―四四二頁)／『京城日報』一九四〇年八月六―七日。座談会の記録は「文人の立場」と題して十三日から二十日まで七回にわたって同紙に連載された。

- (53) 「文藝春秋」一九四〇年十一月号に「顔が変わる」、「文学界」一九四一年三月号に「行者」を発表している。

- (54) このとき文芸協会が報国会に吸収された。これに対して菊池はかなり抵抗し、理事でありながら報国会にも非協力的だったが、大東亜文学者会議では議長を引き受けるなど、仲間に頼まれれば力を貸したという。河上徹太郎「文学的回想録」、朝日新聞社、一九六五、一七頁

- (55) 張欣「張我軍と大東亜文学者大会」、「アジア遊学」No. 13、二〇〇〇(二)

- (56) 『文藝春秋』一九四二年十二月号、『菊池寛全集』第24巻、五〇五―五〇六頁

- (57) 『毎日新報』での連載が終了したのは、日本出発当日の十月三十一日である。

李光洙の日本語創作と日本文壇(波田野節子)

- (58) 「三京印象記」、「文学界」一九四三年一月号、七〇頁

- (59) 林房雄「文学的回想」、新潮社、一九五五、一二九頁

- (60) 大東亜文学者大会の詳しい日程および李光洙の行動については「이광수와 야마사키 토시오, 그리고 기쿠치 칸」(『삼경인상기』에 써어 있지 않은 것)「S A I」第11号(国際韓国文学／文化学会)を参照のこと。

- (61) 前掲論文で筆者は李光洙が「三京印象記」に山崎のことを書かなかつた理由をいくつか推論した。その後、本稿を書く過程で「プロモーション説」が決定的だったのでないかと考えるにいたつた。

- (62) 寺田瑛は「大東亜文学者大会へ」で、改造社の歓迎宴に李光洙が出席していたと書いている。「新時代」一九四二年十二月号、七九頁

- (63) とはいえ、大東亜文学者会議の全議事録を収録した改造社の雑誌「文芸」一九四二年十二月号にある編集部の招待記「ようこそ!」に、李光洙の名前すら出てこないのは不思議な気がする。山本も、今回は李光洙に原稿依頼をおこなっていない。推測だが、山本は李光洙の文藝春秋への接近と対日協力の姿勢に共感しなかつたのではないか。同様に、李光洙のほうでも当局と摩擦を起こしている「改造」への接触を避けたい気持があつたのかもしれない。この年「改造」八一九月号に掲載された細川嘉六論文が共産主義

的だとして九月号が発禁になり、まもなく筆者の細川が逮捕されている。この事件はやがて「横浜事件」へと発展することになる。

(64) 朝鮮文人報国会はこの年四月に発足し、八月十六日に第一回の理事会が開かれている。林鍾国「親日文学論」、高麗書林、一九七六、一四五頁

(65) 姜徳相「朝鮮人学徒出陣」、岩波書店、一九九七、二六三頁

(66) 同上 二五一頁

(67) 一九四三年十一月十九日「朝日新聞」三面

(68) 「朝鮮人学徒出陣」、二六三頁

(69) 一九四三年十一月十一日「朝日新聞」夕刊掲載の談話記事「起て、半島学徒―内地在學生へ小磯総督与ふ」で、小磯は「いまだに志願の名乗りをあげた者は二百名程度と称せられ」と述べている。

(70) 「全集」13、二六八頁

(71) 「全集」13、二六九頁

(72) 一九四三年十一月十一日「朝日新聞」

(73) 姜徳相「朝鮮人学徒出陣」二十一、非国民たち」参照。

最後まで潜伏して逮捕を免れた学生も多く、その数は千名を越えたという。三三七頁

(74) 一九四四年一月二十一日「朝日新聞」三面／同二月二十九日三面／「日本近代文学大事典第5巻新聞・雑誌」。「文藝春秋」は一九四五年三月号まで発行された。

(75) 「東京対談」「朝鮮画報」一九四四年一月号掲載の座談会記事で馬海松の肩書きは「新太陽社社長」になっている。(金允植「李光洙의 日語創作 및 散文選」、도소출판역락、二〇〇七、一九六頁)／菊池は、戦後、日本の台湾と朝鮮

への態度について書いた文章のなかで馬海松のことを回想して「今は新太陽社と改めたモタン日本を興した馬海松」と書いている。菊池寛「臺灣と朝鮮」、「其心記」、建設社、一九四六、一〇六頁

(76) 「新太陽」一九四三年十一月号「近代朝鮮文学日本語作品集(1939～1945) 創作篇5」、緑蔭書房、二〇〇一
所収

(77) 「朝鮮に叫ぶ人々」、「文藝春秋」一九五三年三月号、一〇八頁／「아름다운 새벽」、一七〇頁

(新潟県立大学教授)